

こうした生活を送りながら、幸せにも私は昭和二十三年八月二十日、祖国の土を踏むことができた。

それについても、遠い異国で生活を共にしながら、異郷の地で散った多くの戦友の御霊のご冥福をお祈り申し上げます。合掌

尊い体験

福井県 佐々木 清左夫

福井県今立郡南中津山東庄境二十九号の十二番地、佐々木清左エ門の三男として生まれた。大正九年十二月二十九日誕生。家業は当時農業でした。昭和三年南中尋常高等小学校へ入学し、昭和十二年同校卒業す。家族構成は、祖母、そして父母、子供六人、合わせて九人の大家族でした。

私は昭和十二年四月、大阪市西成区栴通り佐々木硝子店に修業のため就職した。しかし、昭和十五年六月ここを退職して、翌七月、今度は満州一四八部隊、陸

軍燃料所へ軍属として就職す。

昭和二十年八月一日、赤紙召集を受け、即新京二八〇〇部隊へ入隊し、一四五部隊に配属となった。そして、輻重兵として勤務す。兵器は当時五人一組単位で、小銃一丁と手榴弾三個、それから馬一頭が配分された。八月十五日、ガンリン輸送途中、引揚げの命令が出た。即ヒターンして部隊に帰った。そうしたら、天皇陛下のお言葉がラジオで放送されると聞き、早速その言葉を耳にした。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」云々。

このとき日本の敗戦（終戦）を知った。その後、五時間ほど過ぎたころ、新京方面の郊外がもうもうと燃えているのが見える。私はとっさに、証拠隠滅のため、とうとう兵舎に火を放したなと思った。紛れもなくそのころ軍の撤退が始まっていた。

当日の夜十時ごろだった。私たちの部隊の倉庫にはガンリンがたくさん蓄積されていたので、敵の侵入として付近の防火のため夜間立哨せよと命令が出た。入隊してわずか二週間足らずの我々に、そのうえ兵器も

なく、どうせよと言うんだ。そして雨は毎日どしゃ降り、負けた日本に同情的だった。

八月十七日ごろだった。武装解除の命令が出た。道路の交差点付近で、ソ連の兵隊の監視のもとで、このとき初めてソ連軍人を見た。

九月十五日前後と思う。ウラジオ経由で内地へ帰れるからその用意をせよと。できるだけ大きなリュックサックにできるだけ多くの品々を詰めて持ち帰ろう、と皆の申し合わせだった。ソ連兵はまた、一人でも多く貨車に積み込むため、まるで枕木でも積むように押し込めた。それで便所へも行けない。人間としての扱いではなかった。

黒河へ着くまでは三日ほどかかったと思う。途中燃料不足で全員降りて貨車を押したこともあった。しかし、ウラジオ経由で帰国だと、そのことばかりを信じて、さほど苦勞とは思わなかったが、また、こんな不幸なことがあった。貨車が止まったので飲料水を汲みに出た。汽車道より三メートルを越えて出た者五人は、その場で射殺された。私たちの目前での出来事であっ

たが、どうすることもできなかった。

明日はいよいよナホトカへ着くのだと喜んでいたら、ここで貨車に乗り換えさせられた。余りに貨車内が狭いので、皆で相談の結果、皆の持ち物からロープなどを出し合って、中二階の高さにそのロープを張り、各自の装具をその上に乗せたところ、下はゆつたりとして、皆は快楽とは言えないが楽になった。

ただし、食料は欠乏し二日に一回、しかも貨車の二時間以上の停車駅しか飯盒炊さんの許可は出なかった。

そのころになって、ソ連兵に騙されたことを知り、皆の顔色は冴えなかった。

三十五日間乗って、着いたところはウズベク共和国の中のアングレンの町（石炭採掘場）であった。仕事としては、軽重車十二人で河原から石炭運搬である。

また、建築用の基礎石を一カ月くらい運んだ。そしてまた鉄道敷設作業、犬釘を打ち込む作業も腹が減って力が出ない。当時の食事は、三度三度、大豆の重湯が飯盒の蓋に一杯、それでこの重労働であった。また、この国は情けないほど何も無い。食事の漬物にしても

かたいスツパイ青いトマト、砂糖大根のシブイものくらいらいしかなかった。

疲れた体を横にして一眠りすると、夜中に起こされて貨車の荷降ろしが三日に一度は決まってやってきた。今考えると、眠い目をこすりながら、よくぞけがをしなかつたものと思議に思う。

また、こんなこともあった。空腹とは恐ろしいもの、馬糞の中に大豆の原形があれば、水で洗って食べた人や、又は鍛冶屋が機具の焼入れに使った水は殺菌されてあるからと言つて飲んだ人もある。前者も後者も短命となった。隊長いわく「インドのガンジーは水だけ飲んで三年も生き延びたというから、余り汚いものは食べるな」と。

アングレン四大隊の幕舎生活はよかつた。まず南京虫がいらないから安眠できた。作業は鉄道敷設と製材所、それに露天掘り炭坑の上層部の清掃などだった。ここに丸二カ年間労働したが、移動を命ぜられた。同じアングレンだったが、今度は六大隊でした。

ここの作業は地下二百〜三百メートルの坑内作業で、

一日三交代でした。そして、幕舎には南京虫がいっぱいいいて、とても眠れず、舎外の草むらで連日夜を明かした。

そのころの現場監督の昼食は五枚切りの薄い黒パン一枚、しかもスツパイものを作業衣のポケットに入れてきて、昼になると生水を飲みながらパンをかじっていた。これで生命をつなぎ、労働ができるから不思議である。私も何としても生きて帰りたい一心で、三年半毎日乾布摩擦をした。そのためか一回も病気はしなかつた。

長い労働も終えて、ようやく帰還列車に乗って待望のナホトカに着いた。ここでは民主運動が厳しかった。念願のその日は昭和二十三年十二月七日だった。棧橋を渡ると、優しい近郷のご婦人方のお迎えの姿を見、また、長い間本当にご苦勞様でしたの声を聞いた途端、今の今まであの厳しかった民主運動も、一時的夕立雲のように消え去ってしまった。

わずかな手当をもらったとき、長い間の空腹の思い、一度満腹感を味わいたいと思つて売店で芋羊かんを買

つて食べたところ、久しぶりの満腹。いつまでも忘れられぬ思い出となった。

毛布一枚で引き揚げた弟の身分、そして妻と子供一人が北海道に引き揚げて待っている。兄貴は機業をやっている。この兄貴の臍をかじりながら、独立して私も織物工業の経営主(三部制)となった。

シベリアの長い苦勞と尊い体験を生かしながら、四十五年この方頑張っています。

強制抑留の思い出

長野県 上 沼 景 明

昭和十四年四月、滿蒙開拓青少年義勇軍に参加し、内原訓練所において二カ月間の内地訓練終了と同時に渡満、勃利大訓練所に入所。一カ年の基本訓練を終え、綏陽県老菜營小訓練所に入所し訓練中、徴兵検査の結果甲種合格となる。

昭和十七年一月十日、福知山西部歩兵第六二部隊に

現役入隊、三カ月間の教育を受けた後、満州国錦州省山海関獨立守備隊歩兵第二大隊(滿州第三八七部隊)村上隊の所屬となり勤務。その後、湯崗子第三航空情報連絡隊に転属勤務中、二十年八月終戦となり、ここで武装解除となる。

武装解除後、ソ連軍の指令により鞍山に移動する。鞍山では、日本が誇った鞍山製鉄所の解体。ソ連に輸送するための貨車の積み込み作業。彼らも立派な機械設備には目を見張る。解体し、運べる物はほとんど持ち去る。二カ月近くかかってようやく解体作業も終わり、日本に帰る日を一日千秋の思いで待つ。

やがて貨車が入り列車に乗る。日本に帰るかと思っていたのが、列車は西へ西へと約一カ月、着いたところはソ連邦のウズベク共和国アングレンである。ここは半地下式の粗末な建物が我々の入る収容所であった。細い通路の両側の二段の床にすし詰めの生活。食事は粗末な上に量が少ない。我々二十代、三十代の働き盛りの者にとつてはまことに耐え難いことだった。その上、作業は道路工事、建築工事のレンガ積み、大工仕